
レジスタンス

TAKE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レジスタンス

【Nコード】

N3550I

【作者名】

TAKE

【あらすじ】

・・・未知なる生物“キメラ”の脅威はロシアから始まった。発生源不明で壊滅的に増殖速度の早い新種のウィルスが拡散。一夜にして一つの村が壊滅、大きな町までも破壊されたと伝えられた。

1930年代後半、

欧州各国は一団となってロシア国境を封鎖。

“キメラ”は、ロシア国内に封印された。

1949年、
封印されていたはずの“キメラ”が動き出した。
ロシア国外への侵攻を開始。
そして数週間のうちに欧州全土が制圧された。

1950年3月、
海峡により安全だと思われていたイギリスにも侵攻。
“キメラ”は点在する基地、前哨キャンプをも制圧し、勝利の狼煙
をあげた。

1951年7月11日、
アメリカ軍が、イギリス東岸からの上陸作戦を実行。
その中に、後に伝説となる一人の軍曹がいた - - -

一章（前書き）

未熟者ですが、よろしくお願ひします！

一章

一章

蛍光灯に照らされた廊下に人影は無い。
静まり返った廊下を、ネイサン・ヘイル軍曹は歩いてきた。
彼は並んだドアの一つを開ける。

そこは小さなロッカールームになっていて、色は緑で統一されている。

廊下と同じく、ヘイル以外は誰もいないようだった。

他の仲間全員、外で準備しているのだろう。

そんな事を考えながら、一番奥のロッカーを開ける。

ガランとしたロッカーには、薄緑色のヘルメットと一枚の写真ぐらいしか入っていない。

ヘイルは写真を取り出すと、ふと眺めた。

空軍時代の友人達……ほとんどが死んで、もう何人かしか生き残っていない。

恐らく、今回の作戦でも多くの兵士が散っていくのだろう。

あるいは、ヘイル自身もだが。

写真を仕舞った彼は、ヘルメットを取り出して被った。

それからナイフを腕のホルダーに差し込み、最後に武器を……
M5A2カービン銃」を抜く。

通称「パドル」と呼ばれる武器で、アメリカ軍で正式採用されたライフルだ。

木製のストックは特徴的な形をしていて、パドルと呼ばれる由来になっている。

それ以外は全て金属のパーツで構成されていた。銃身下部には「M200グレネード・ランチャー」が装備されていて、この武器の攻撃力を確固たるものにしてている。

それらを装備したヘイルは廊下に出て、歩きながら作戦について考えた。

概要はミーティングで聞いていた……イギリス東岸からの上陸作戦だ。

上陸した後は散開し、敵を殲滅する……そういう作戦だった。

だが、何か妙だ。

何故、何の情報も渡されない？

ヘイルが引っ掛かるのは、そこだった。

確かに、少しは情報を渡された。

だが、敵は何なのか、何が向こうで起こっているのかは明かされていない。

新聞やテレビでも、そうした情報は流されていない。

外に出ると、何十もの輸送機「ワスプ」が並んでいた。

翼の両端に巨大なプロペラが一つずつついた、アメリカ陸軍の兵器だ。

プロペラは自由に動き、ホバリングも可能になっている。

そちらに向かって歩きながら、ヘイルは考える事をやめた。

何が待っているかは、すぐに分かる。

一章（後書き）

感想等、お待ちしております

二章

二章

イギリス・ヨーク

1945年

7月11日

ヘイルは、半ば廃墟と化した民家の中にいた。

彼が座っているのは、崩れた上階の床が坂のようになっている場所だ。

その顔には、緊張が色濃く出ている。

カービン銃を手入れする手は、僅かだが震えていた。

彼は、着陸地点からここまで走ってきたのだ。

降りてからの出来事は、悪夢のようだった――

ヘイルが降りると同時にワズプが迫撃砲で粉々になって、その破片が降り注いだ。

全員が混乱しながら飛び出していった、敵に撃たれた――ヘイルは、そんな中でも何とか生き残った。

それは、どうにか平静を保っていたられたからだ。

彼は今まで、9人程度の敵を倒した。

彼のすぐ近くに仰向けで横たわっているのも、その一人だ。

それは、どう見ても人間だとは思えなかった。

蛇のような細長い頭にある裂けた口の上には、8つの金色に光る目が並んでいる。

灰色の筋肉質の身体には、何本も細いホースが巻き付いていて、背

中にある4つのパネルが出ている機械に繋がっていた……これは恐らく冷却装置だ。

先程、彼の撃った傷がほとんど塞がりかけているところを見ると、奴らの代謝率はかなり高いらしい。

……おい、こんな事を考えている暇があるのか？

「その通りだ」

と彼は内なる声に応え、立ち上がった。

それから、事前に渡された地図を広げる。

着陸地点からなぞっていくと、彼のいる民家につく。

どうやら、この家の裏通りに出れば別部隊と合流できるようだ。

「ここか」

呟いたヘイルは、地図を畳んでポケットに入れた。

それからまた歩き出そうとして……ふと足を止めた。

彼が見たのは、化物の手元だ。

そこには、見た事のない武器がある。

ホースが繋がれた、金属製の武器。

暫くそれを見ていたが、ヘイルは屈んで武器を拾った。

武器は多い方がいい……特に今のような状況では。

三章（前書き）

台詞の少なさに自分でもびっくりにです。・・・
世界観が伝えられていたら、と思います。

三章

三章

頭のすぐ横を赤い弾丸が通り抜けて、ヘイルは隠れていた車の影から半身を乗り出した。

そして敵の位置を確認し、3発撃つ。

先程放たれたものと同じ赤い弾丸が胸に当たって、化物が倒れる。それを見てからヘイルは立ち上がった。

あの家の裏の階段は、小さな裏通りに繋がっていた。

今いるのは、そこから少し進んだ場所で、そこら中で車が炎上している。

どこも同じようなものか、とヘイルは思った。

無傷な建物は少なく、ほとんどが崩れ落ちて奴らの根城になっている。

フレームだけになったバスの間を通り抜けると、そこには少し道が続いて、それから何かの建物に向かっていた。

見れば、どうやらオブジェのようだった。

半分が倒壊した門だ。

手入れがされていないのか、荒れた庭が前に広がっている。

地図の通りなら、門の奥には小さな河が――

不意に、門の陰から化物が2体現れた。

不意の一撃を危うい所でかわしたヘイルは、そのまま後退して庭を囲むブロック塀の前に屈みこむ。

攻撃が止んだ頃合いを見計らって見ると、門の奥から次々と敵が来

ていた。

合計で5体だ。

2体は手前に、残りの3体は後方にいる。

間隔は、それほど広くない。

ヘイルは腰にある5つの破砕手榴弾の内の1つを掴んだ。

応戦しながら、彼はピンを抜いて手榴弾を投げる……

ドン！！

という音が響いて、爆発した。

破片と爆風が撒き散らされる。

全てが宙を舞い、1体が足元に飛んできた。

その死体を避けて、ヘイルは草の中を歩く。

まだ隠れていないかと警戒したが、杞憂だったようだ。

ヘイルは武器を降ろして門を潜る。

小さな段差を降りると、そこには河原が広がっている。

だが、その河に水は流れていない。

乾いた河床は左に続いていた。

降りて歩き始めると、すぐに向こうから足音が聞こえてきた。

「誰かいるのか？」

声をかけると、相手が角から現れた。

別部隊のメンバーだ。

「ヘイル軍曹、無事だったか！手酷くやられたな」

レズリー大尉が、そう言っつて顔をしかめた。

ヘイルの服は敵や味方の血で塗れているので、まともな反応と言える。

「ああ、歓迎されたとは思えない」

とヘイルは応えた。

「他の仲間はどうなった？何人いるんだ？」

死んだ、と言おうとしたが言えず、口ごもる。
人の死は慣れる物ではない。

大体は察したか、レズリーはそれ以上は聞かなかった。

「そうか・・・なら俺達と一緒に集積所に行こう。そこが合流地点
になってる」

そう言つて、レズリーは駆け出した。

ヘイルも後を追う。

急がなくては、と思うと自然と足も速くなった。

・・・だが、彼の足は意外にも早く止まる。

「どうした？」

レズリーがヘイルの疑問を口にして歩みより、眉を潜めた。

ヘイルも、目にした物が理解出来ずに目を凝らす。

「あれは・・・」

ヘイルは口を開こうとしたが、それより早く黒い意思のある固まり
が彼等を波のように包んだ。

そこまで来てヘイルは、この固まりが小さな虫が集まって出来てい
た事を知った。

「クソ！」

「入ってきた！服の中に……」

周囲から悪態が聞こえる。

ヘイルは、虫を振り払おうともがく。

だが、口の中に異物が入りこんだのを感じて……意識が途切れた。

四章

四章

意識が混濁している。

訳が分からないまま、ヘイルは目を開けた。

視界が霞んでいて、よく見えない。

それでも立ち上がると、誰が駆け寄ってくるのが分かった。

「軍曹、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ。ただ・・・」

しゃがれた声で応えて言い淀む。

くそ、何が起こったんだ？周囲を見ると、他の兵士は全員が倒れていた・・・彼以外は。

「行けるか？」

兵士・・・名札に「エイムス」とある・・・に眉を潜めて聞かれ、ヘイルは頷いた。

「顔色が悪いぞ。休んだ方がいい」

「いや、いい。部隊に追い付きたい」

有無を言わせぬ様子に、エイムスは頷いて走り出した。そうしながら、先程の虫について考える。

あの武器を持った化物とも違う気がするが、無関係とも思えない。
一瞬、嫌な想像が頭に浮かんだ。
虫が彼の身体に卵を産みつけて、這い纏わっている……

「まさか」

不安を消す為に呟くが、完全には消えない。
しかし……

目の前を何かが通った。

「今のは何だ？見逃した！」

エイムスがヘイルを振り返って言った。

「分からない。昆虫に見えた」

そう、虫のように4脚で走っていった。
また新しい化物か。

「行こう。茂みに注意しろ」

エイムスが言い、昆虫もどきが消えた巨大な排水溝に目を配りながら角を曲がる。

その先には小さな木製の橋がかかけられており、更に奥にも排水溝があった。

橋の下を潜ってそちらに向かい……

昆虫もどきが、排水溝の上から現れた。

ヘイルには、武器を持つ化物と同類である事がすぐに分かった。小型犬程の大きさで、あの化物と同じ金色の目が2、3個並んでいた。

体の後ろからは尾が伸びていて、先端からは2本の鋭い針が突き出している。

鉤爪のような節を持つ4本の脚を動かしてくる様は、波のようだ。顔の中心にある1つの目は、2人に向けられていた。

五章（前書き）

すいません、更新が大幅に遅れました！
再び再開します。
それでは

五章

五章

波のように向かってくる虫……リーパーの群れを目掛けて、ヘイルとエイムスは引き金を引いた。
先頭の数匹がバラバラに吹き飛ばされるが、その倍の数が新たに飛び掛かってくる。

「クソ、忌ま忌ましい虫けらが!!」

「気をつける、まだ来るぞ!」

そう警告しながら、ヘイルはグレネードを撃ち込む。
しかしリーパーは素早く離散し、エイムスに食いついた。

「やめろ!」

エイムスは悪態をついたが、バランスを崩し倒れた。
そこに残ったリーパーが殺到し、彼の身体に食らい付いた。
駆け寄ったヘイルの蹴りで散り散りになったリーパーを始末して確認する。

喉を食いちぎられ、絶命していた……ああ、また殺された。
しかし悲しむ暇もなく、ヘイルは立ち上がって駆け出した。

木製の階段を上り、先に進む。

クソ、誰か他の兵士はいないのか?

願うが、今の所は誰もいない。

死体すらないが、恐らくあの虫が喰ってしまったのだろう。

「どうなってる」

思わず呟くと、ヘイルの中に怒りが沸いて来た――

訳も分からず放り出されて、仲間が殺されていく状況に対してだ。

奴らが何者か分からないが、必ず根絶しなければ。

考えながら、小さな橋を渡る。

すると、目の前の道が少し落ちている向こう側からリーパーが飛び出してきた。

やはり数が多いが、ヘイルは焦らず引き金を引いた。

幸いな事に、この虫はあの人型の化物――ハイブリッドのように頑丈ではない。

くたばれ、虫ども。

滅多に暴言を吐かないヘイルだが、今は違った。

的確に撃ち込まれたリーパーが四散し、その体を踏み付けて別のリーパーが跳び掛かる。

1匹が顔面を目掛けて跳んだが、反射的にヘイルは殴り倒した。

そこへ草むらから2匹が跳躍した。

これも同じく殴り倒すと、踏み付けて弾丸を撃ち込んだ。

リーパーの破片を踏み潰して前方を確認すると、

途切れた河辺に巨大な建物が建っていた。

よく言えば美麗、悪く言えば成金趣味か。

何に使われているか分からないが、どうやら奴らの拠点にされているらしい――玄関近くに3体が待機している。

威嚇に数発撃つと、すぐに建物に入っていった。

あの中にも大量にいるのだろう。

ヘイルは自分でも気付かない内に、手の中のカービンライフルを握り締めていた。

報告書（前書き）

ちよつと書いてみました。

今後もちよくちよくこついった物を書こつと思います

報告書

キメラ調査報告書

アメリカ陸軍軍医、レイモンド・ベルナールが記す

・

1. ハイブリッド

まず最初に、このポピュラーな……という表現が正しいか分からないが……キメラについて記そう。

彼らは最多のキメラで、初期の進攻から確認されていた。

クロウラー（後述）を除けば、最も危険な種と言えよう。

異常とも言える程の代謝により発した熱を抑える為に、背中には冷却装置が装備されている。

故に彼らは生命力が高く、多少の攻撃ならば即座に回復してしまう。彼らを倒すならば、カービンライフルを素早く撃ち込む事だ。

また、彼らが何を食しているのかについては諸説あり、現在も調査が続いている。

もつとも、調査する者は大半が殺されてしまったが。

追記）彼らの動きは特殊部隊のそれだ。

学習能力が高いらしい

2. クロウラー

クロウラーをキメラの一種とする事を疑問詞する者もいるが、私はキメラであると思う。

キメラウィルスの感染は、クロウラーによる物だからだ。

ゴキブリのように非常に小さく無力に思われるが、その一匹一匹がキメラウイルスの塊であり、人間を感染させる事だけを目的として放たれる。

残ったクロウラーもまた、リーパーとして脅威となるのだ。

さて、彼らの輸送方法だが、「スピア」によって数万匹が一気に放たれ、

僅か5分足らずで市街地や村を壊滅させる。

スピアを射出するゴリアテについては後述するが、とにかく私が思う事は、何とよく出来た兵器だ、という事である。

3.リーパー

クロウラーに続き、よく知られているリーパーについてだ。

リーパーは元はクロウラーであり、感染出来なかったクロウラーが変体する事でリーパーとなる。

リーパーポッドと呼ばれる繭の中でクロウラーはリーパーへと変化し、

獲物の接近を察知すると飛び出して食らい付くのである。

何よりも脅威なのは、その数だ。

いかな兵士であっても、彼らが大群で押し寄せては対処出来ないだろう。

私も一度、偵察部隊が壊滅した市街地に潜んでいた

リーパーの群れに襲われる光景を見た事があった。

あのような死に方は御免だ。

さて、ここで一度切らせて頂こう。

キメラの数は膨大であり、まだ記述するべき事は残されているが、それだけに全てのキメラ種の編纂には時間がかかる。

なお、この報告書はレイチェル・パーカー大佐に送って頂きたい。

六章

六章

唐突に聞こえた物音に、ハイブリッド達は素早く反応した。彼らのコミュニケーションは、特殊な言語によって交わされる。端的な命令に、2体が動いた。持ち場を離れた彼らは兵士の動きで階段に向かうが、そこに敵の姿は無かった。

となれば階下だ。

慎重に先頭の1体が降りていき、しんがりにもう1体がつくと、彼らは奇妙な事に気付いた。

小さな袋が落ちているのだ。
疑問を感じた1体が屈み込み――

直後にグレネードが放たれ、2体の首を吹き飛ばした。

凄まじい爆音は、2階の化物を怒らせるのには充分だったらしい。唸り声が響き、次いで慌ただしい足音が聞こえてくる。

ヘイルはカービンライフルを構えたまま、階段を駆け上がった。置かれた木箱の陰から1体が現れたが、頭を殴って昏倒させる。木箱の陰に隠れながら、弾丸の合間に数を確認した。

部屋の中央に3体、上に1体。

まずは上の敵を倒して、それから下――これでいい。瞬時に計画し、ヘイルは身を乗り出した。

狙うのは足場だ。

木製の床は数発であっさりと抜け、ハイブリッドを落下せしめる。その体は突き抜けて、更に落下していった。不運な事に、その衝撃は周囲にも影響した。周りが纏めて碎け、3体が滑り落ちたのだ。部屋に入って見下ろすと、ハイブリッド達もがいている。

「殺してみる」

静かに言って、ヘイルは先に進んだ。

少し路地を歩いた先の通りで、ヘイルは愕然としていた。彼を止まらせているのは、乗り捨てられた戦車ではない。その後ろ、バリケードの向こう側に突き立った

金属製の巨大な「槍」だった。

ジェットらしき物が後部にあり、円筒形の物体が4つ設置してある。これは・・・こんな物は、見た事が無い。

全く、あの化物といいこの槍といい、イギリスはどうなっているんだ？

この巨大なスピアが何であれ、役割は終えたようだった。

見れば、更に数本が市街地に点在している。

脳内の上層部への質問リストにこれを加えながら、ヘイルは通りに下りる。

途端、狙ったように無線が入った。

「こちらヘイル」

>ああ、ヘイル軍曹！無事だったか。私だ、ウィンカーズだ<

ああ、仲間が生きていた。

ヘイルは安堵し、小さく息をついた。

>軍曹、今どこにいる？<

「ウォルター通りです。すぐ向かいます」

>そうか。早く来い、敵さんがお待ちだぞ<

「了解」

無線を切ったヘイルは、すぐ近くの戦車を見た。

- - - 使えない事は無いだろう。

七章（前書き）

昨日の応援の振り替えで休日なので、早速更新です！
戦闘と分けたかったので、やや短めにしました。

七章

七章

「やっと来たか、軍曹！待ち兼ねたぞ」

戦車で迫撃砲を破壊しながら進んだヘイルは、バス集積所の前に着いていた。

豪快に笑いながら近付いてきたウィンカーズ大尉は、サングラスがトレードマークの軍人だ。豪胆な性格と似合っている。

「ただ今到着しました」

「そんな事が見れば分かる！それより気になる事は敵の狙いだ」

そう言うと、大尉は周囲の兵士を見回して一枚の紙を広げた。ヨークの地図だ。

「我々は今、ここにいる」

ほぼ中央にある集積所を指す。

その指を滑らせ、市街地への侵入路に置いた。

「そして敵はここから向かってきている。集積所は連中にとっても都合がいいらしい」

確かに、この場所を確保すれば拠点になるだろう。

「我々の任務は、この場所を奪還し、守り抜く事だ。いいか？」

了解、と全員が応え、大尉は満足げに頷いた。

「奴らはもう根を張ってる。すぐに突入するぞ！」

了解、という声が再び響き、彼らは突入を開始した。

・

元は事務所だったのだろうか。

部屋の一角にあった巨大な窓は破られ、ただの枠と化している。

「さあ、始めるぞ！」

ゲイリー、お前達は左から回り込んで横から叩け！

ウィルソン、コール、左に向かえ。

お前達は回り込まずに斜めから応戦するんだ！

残りは俺に着いてこい！」

命令を受けて、兵士達は窓から外に飛び出した。

ヘイルも後に続く。

集積所の全体を見渡すと、ガススタンドや機材が見えた。

敵はすぐ正面に固まっっていて、固定銃座まであった。

大尉が続いて下に向かうと、小さなバリケードがあり、その向こうから敵が狙っている。

「展開して応戦しろ！クソツタレどもを殲滅するぞ！」

すぐさま大尉がカービンライフルを撃ち込むと、それが合図となっ

た。

左に向かう兵士達を横目に見ながら、ヘイルも引き金を引いた。

八章（前書き）

お久しぶりです、皆様！

ここ最近、テストやら審査やらですったもんだで、書く余裕がありませんでした……。

更に戦闘をどう描写するか悩み、更新が遅れました。

今後は出来るだけ早く更新出来るようにしていきますので、よろしくお願ひします。

では

八章

八章

戦闘が開始すると、すぐさま機銃掃射が撃ち込まれた。

「伏せろ！何かの陰に隠れるんだ！」

ウィンカーズの指示に、ヘイルは滑り込むようにバリケードに隠れる。

数人は頭を撃ち抜かれて倒れたが、多くは残って攻撃を開始した。バリケードから顔を出し、敵を確認する。数は5人だ。

「ヘイル軍曹、右をやれ！他の奴らは援護しろ！」

「了解」

その指示に、ヘイルは手榴弾を取り出しピンを抜いた。

纏まった連中なら、これで潰せるだろう……そう考え、彼は半身を乗り出した。

幸いにも、右翼の敵は弾丸を装填していた。

「手榴弾行くぞ！」

叫んだ直後、狙いを定めて投げる。

それはバウンドすると、敵の目の前で爆発した。

絶叫を掻き消すように銃声が響き、新たに2体の敵が倒れた。

「よし、いいぞ！他も続け！」

大尉の言葉に、尻込みしていた者達が次々と引き金を引く。状況は、こちらに傾いていた。

・

ウィルソン・オーランドとコール・マーソンを筆頭とした兵士達は、左の廃棄されたバスの中を走っていた。

彼等の任務は援護であり、銃座の注意を逸らす事だ。

だが・・・とウィルソンは舌を打った。

彼にしてみれば、連中は巨大なゴキブリだった。

なにせ数が多い。

今も、ガススタンドの近くの門から新たに数人が現れたところだった。

「大尉、新手です。数は7人、ガススタンドにいます」

『すぐに排除して銃座を潰せ！』

「了解」

報告を端的に済ませ、ウィルソンはバスの陰に隠れた。

すぐ横にコールが並び、他の兵士・・・アンヌやミラディもガススタンドを狙った。

「来てみる、クソツタレども！」

誰かが叫び、ウィルソンは苦笑した。

あいつの言葉は、全員の気持ちを代弁しているに違いない。

ウィルソンは、こちらに向かってくるハイブリッドにグレネードを撃ち込んだ。

賢いのか偶然なのか、そいつらは散開して爆発を避けた。

だが、避けた先の事は考えなかったようだな――ウィルソンは続けて引き金を引き、3人を仕留めた。

奴らも撃てば死ぬのだ、恐れる事はない。

「撃ちまくれ！」

隣でコールが叫び、爆音が響いた。

九章（前書き）

今回、ちよつとした伏線・・・といえるかどうか分かりませんが入れてみました。

原作を知る方にはモロバレですが（＾|＾；）
お楽しみ頂けたら幸いです。

・・・あれ？軍曹と二等兵ってどっちの階級が上だっけ？

九章

九章

ヘイルは引き金を引きながら、奇妙な感覚を覚えていた。何故か妙に早く動いている気がする――それに、傷の治りが早い。それは享受すべき物だが、どちらか彼に不安を与えていた。これでは、まるで・・・あの化物のようだ。

「まさか」

戦闘の最中でその考えに至り、ヘイルは思わず呟いた。思い当たる節はあったが、無理矢理振り払った。ゾンビじゃあるまいし、有り得ない事だ。気にしすぎているだけだろう。ヘイルは気持ちを落ち着けて、ウィンカーズの指示を聞いた。

「さあ、ガススタンドの連中を一掃するぞ！2部隊に分かれる！」

1部は敵の消えた道を駆け出し、残る数人は機材の間を抜けてガススタンドに向かう。

ヘイルは後者だ。

ハイブリッド達は、2つの部隊に対して迅速に行動した。そこにいた6人が3人ずつ分かれて迎え撃つ。

乱戦の中、ヘイルはある一点に狙いをつけて引き金を引いた。端に置かれたガスタンクだ。

それは小さいが、十分な威力を發揮した。

その場にいた3人が吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる……だが、まだ生きている。

「クソ、なんて生命力だ！」

隣の兵士が叫び、弾丸を打ち込んだ。

肩を貫くが、それも次第に塞がってしまう。

「頭を狙え。脳を撃ち抜けば奴らもすぐに死ぬ」

ヘイルの言葉に兵士がすぐさま狙いを変えて額を撃ち抜くと、脳と骨の欠片を噴き出して倒れる。

それを皮切りに、他の兵士も頭を狙い始めた。

が、ハイブリッドの動きは素早く、多くの弾丸が外れてしまう。

そこへ光弾が放たれ、数人が倒れた。

ヘイル達の戦闘を見ながら、ウインカーズはヘイルに違和感を感じていた。

あの男は、まるで連中のように素早く動き、弾をかわしている。

それが無意識にせよ意識的であるにせよ、異常としか思えなかった。そう、驚異的と言える動きだ。

更に聞いた話では、ヘイルは一時倒れていたらしい。

目が覚めた時には1人だけ起きた、という事だった。

どうにも不安が沸くが、本人の様子からは特に変化は見られない。ならいいだろう、と彼は思った。

彼は細かい事を気にしない人間だ。

考えを振り払い、ウインカーズは戦いに戻った。

10分後、制圧が完了した。

「皆、よくやった。我々はこの小さな楽園を守り通せたぞ」

ウィンカーズという言葉に、多くの兵士が安堵の息を漏らした。出来ればあんな化物とは戦いたくない、というのが意見だろう。

「ありがとうございます」

不意に背後から言われ、ヘイルは振り返った。

そこにいたのは、先程の戦いで隣にいた男だった。

「あなたがいなかったら全員がやられていた」

「いや、俺は何もしてない。ただ・・・」

「あなたがどう感じようと、自分は感謝しております」

その言葉にヘイルは苦笑した。

「そうか。それは・・・」

「大尉、あれを！！」

切迫した声が聞こえて、ヘイルは言葉を切ってそちらを見た。空を指している。

一体・・・？

見上げた兵士達は、巨大な鉄製の槍が降ってくるのを見た。

「新手が来たぞ！」

ウインカーズが言っつて、ライフルを構える。

落下した槍は、あらゆる場所に突き立った。

ヘイルの近くに突き立った1本がドラム缶の山を崩し、ヘイルに激突する。

衝撃に頭を揺さ振られたヘイルは、地面に倒れ伏し――槍から黒い虫が拡散する光景を見たのを最後に意識を失った。

九章（後書き）

次話からは研究所編です！
道は長い・・・

十章（前書き）

お久しぶりです！

改造センター編、開始です。

今回は戦闘ばかりになってしまいました。次で新たに味方が登場します。

頑張ります！

十章

十章

頬に冷たい木の感触を感じる。

ヘイルは眉を潜め、まず腕を動かした。

異常はないらしい。

次に足を動かし、やっと彼は目を開けた。

どこかの小部屋にいるようだ。

床は木だが、壁の一部は金属で覆われ、入口は円形の金属が囲っている。

そして、その向こうには……

「何だ？」

ヘイルは愕然と呟き、目の前の光景を凝視した。

隣室では、奇妙な作業が行われていた。

部屋の中央に置かれた台の上やその傍で、多数の兵士達が気を失っている。

全員、何故か上半身は裸だ。

だが、それだけではない。

部屋の中には2体の奇怪な生物がいた。

そいつらの死体のように青白い体が、ライトに照らされて鈍く光っている。

身に纏っている物はあの銃を持った化物と似ているが、こちらは武装しているようには見えない。

生気のない表情も相成って、貧弱な印象を与えてきた。

だが、何をしてくるか分からない以上、慎重に行動するべきだろう。そう判断し、ヘイルは倒れたままで様子を見る事にした。

その貧弱な奴ら……ヘイルは取りあえず「ゾンビ」と呼ぶ事にした……は目的もなくうろついているように見えたが、1体が台の上の兵士を掴んで持ち上げた。

そして部屋の奥、奇妙に太いチューブ状の物の入口まで担いで歩いていく。

ゾンビは兵士の体を直立させて、カプセルのような機械に固定した。すると、機械が閉まって兵士の体がチューブの中を通過して消えていった。

あれは何か分からないが、危険な物だ。

あの化物に捕まればどうなるかなど、明白だった。

……戦うしかないだろう。

ヘイルは武器を探したが、どうやら取り上げられたらしく、それらしき物は見当たらない。

ヘイルは多少なら格闘の経験がある。

腹を決めた彼は息を吸い、扉の陰から飛び出した……向かう先は、台の近くにいたゾンビだ。

反応するより早く、ヘイルはゾンビの顔面にストレートを叩き込んだ。
だ。

確かな感触が伝わる。

が、ゾンビは壁に叩きつけられただけで、まだ生きてはいた。

……しぶとい奴らだ。

舌を打ち、ヘイルはゾンビの腹に蹴りを入れた。

再び叩きつけられたゾンビは、気絶したようだった。

ようやくもう1体が反応し、両手を突き出し、歯を剥き出して向かってくる。

本当にゾンビのようだな、と思いながらヘイルは蹴り込もうとする

……が、ゾンビが急に速度を上げて飛び掛かった。

口が裂けんばかりに眼前で開き、鋭い歯が剥き出しになった。

これがこいつらの武器か。

ヘイルは唸り、頭をぶち当てた。

絶叫と共にゾンビがよるめく。

その隙を狙い、背後の金属に叩きつけるようにタックルを食らわせた。

それで、遂にゾンビは動かなくなった。

十一章

十一章

レイチエル・パーカーは、独房の中にいた。

隣では仲間達が必死でガラスを砕こうとしているが、あれはそう簡単には壊れない。

全く、最悪の一日ね。

思わず溜息が漏れた。

彼女の任務は『エンジェル』と呼ばれるキメラの護送だった。

ところが市街地に入った途端にキメラの一群とストーカー……キメラの対空用四足歩行兵器だ……の襲撃を受けて『エンジェル』を奪われ、彼女達は捕らえられてしまった。

「ツいてないわね」

ここ、改造センターに来てから何回目かの眩きに、自分でも苛立つ。諜報部の情報が正しくなかった事で被害にあったのは、皮肉にも諜報部大佐の自分だなんて。

誰でもいい、助けに来て……そう願うが、様々な情報を知る彼女自身、脱出は不可能な事が分かっていた。

と、その時だった……部屋の扉が開く音が響いた。

それ自体は珍しくもないが、入ってきたのは……人だ。

パーカーは知らないが、ネイサン・ヘイルという人物だった。

ヘイルは部屋に入るなり、人の姿を見た。

独房に入れられている女性だ。
よかった、まだ生存者がいた！
駆け寄ると、彼女が叫んだ。

「コンソールを撃つて！」

言われた通りにコンソールを破壊すると、天井の一部が開いた。
これで彼女は逃げられる。

「ありがとう。あなたは？」

「アメリカ陸軍軍曹、ネイサン・ヘイルだ」

「そう。」

私はイギリス軍諜報部のレイチェル・パーカー。
階級は大佐よ」

ヘイルは一瞬、駆け寄ってきたパーカーの目に興味と不安が見えた
気がしたが、詮索はやめておいた。
今の状況では賢い行動ではないし、不安でないはずがない。

「あなた、何故ここに？」

「化物に捕まって連れてこられた。ここは何だ？」

「カメラの改造センターよ」

さらりと出た答えに、ヘイルは眉をひそめた。
彼女は今、何と言ったんだ？

「どづいつ事だ？ここは……」

「今はやめましょう。」

私はあそこから逃げて助けを呼ぶから、あなたは別ルートから出て無線は0・05267よ」

そうまくし立てると、パーカーはすぐに天井の通気孔に上る。

「出てから全て教えるわ。」

今は逃げるのが先よ」

「……ああ。そうしよう」

そう言葉をかわし、ヘイルはパーカーを見送った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3550i/>

レジスタンス

2010年10月28日07時17分発行